

岩槻城三の丸御殿復元研究



Keywords

埼玉県 岩槻城 本丸御殿
三の丸御殿 黒門 成田氏

AK15010 伊藤 誠祥

1. はじめに

1-1 研究背景・目的

埼玉県さいたま市岩槻区にある岩槻城は、城地と城下町を堀がとりこむ総曲輪型城郭。この城郭は全国でも珍しく16世紀に整備されたと言われている。これは、小田原城など後北条氏に関連する城郭に見られる築城法であり、わずかに残る中世遺構部分から後北条氏時代の様子を知らねることの出来る数少ない大変貴重なものである。

江戸時代には徳川家による日光社参が行われるようになると、本丸御殿が将軍の宿泊所として利用され、城主は二の丸御殿で暮らした。徳川将軍が本丸御殿を利用した際の復元研究は2006年度論文として関口陽子氏が実施した。一方で、享保13年(1728)に本丸御殿が焼失すると、将軍は二の丸御殿を利用するようになった。元禄5年(1693)に松平忠周が三の丸に殿舎を新築し、居所とした。これ以降、城主の居所は三の丸御殿であったとされている。この三の丸御殿の絵図が近年2枚新たに市に寄託されたり、発見された。また、岩槻城城門の黒門、岩槻城裏門、時の鐘の現存遺構の修復工事が計画されている。

そこで本研究では、現存遺構である黒門や絵図から三の丸御殿の姿を明らかにする。また、享保13年(1728)大火災前と同年以降の三の丸御殿を比較・考察したい。その上で、御殿の復元とともに黒門の復元を行うことで、黒門の修復工事計画への貢献を目指す。

1-2 研究方法

- ① 黒門の実測調査を行う。
- ② 黒門の実測結果、「三の丸御殿絵図」を参考として三の丸御殿の復元を行う。
- ③ 関口論文での本丸基準寸法は6尺3寸であったとしている。三ノ丸御殿の平面図を基に比較・考察を行う。

1-3 実測調査

岩槻城黒門、裏門

調査日：2018年/7月30日、9月27日

調査地：埼玉県さいたま市岩槻区太田3-4他

2. 岩槻城について

2-1 岩槻城の概要

荒川(現在の元荒川)右岸の台地にあり、川と沼沢地、西南に連なる台地を利用した平城である。北から東は川を自然の堀とし、西から南には城下町も含む土居(大構)をめぐらした。

大構内総面積(997,293㎡)、城内面積(109,560㎡)、本丸(2706坪)、二の丸(2724坪)、三の丸(1万8996坪)

岩槻城には天守閣はないが、埼玉県さいたま市岩槻区太田3丁目の曲輪を中心に、天神曲輪、御茶屋曲輪、竹束曲輪、竹沢曲輪、城米蔵があり、沼をはさんで北西には新正寺曲輪、南東に鍛冶曲輪、新曲輪と、多くの曲輪から成る、曲輪内総面積3万2900坪の規模の大きい城郭であった。

築城者、築城年は不明であり、通説では長禄元年(1457)太田道真・道灌父子により築城されたとされている。しかし、忍城城主成田頼泰の父成田自耕斎正によって文明9年(1478)に築城されたのではないかとする説が有力となっている。

2-2 岩槻城の歴史

表1. 岩槻城に関する歴史年表

年代	近世城主	出来事
康正2年(1457)	-	対古河公方の戦略拠点として、扇谷上杉家の重臣太田氏によって築城(一説)
文明10年(1478)	-	忍城城主成田頼泰の父成田自耕斎正等によって築城(一説)
天正13年(1585)~ 天正17年(1589)	北条家	豊臣氏との戦いに備えて、修復・拡大防御強化を行う
天正15年(1587)	北条家	大構の普請
慶長13年(1609)	高力家	大火災によりほとんどが焼失
元禄5年(1693)	松平家	三の丸曲輪内に新たな城主居館造営
享保13年(1728)	永井家	本丸御殿再び焼失、御成御門・櫓・土塁は維持
明治3年(1871)	大岡家	廃城
明治6年(1873)	大岡家	民間に払い下げ
明治11年(1878)	大岡家	建造物の解体

2-3 現存する遺構

堀・大構跡…北条氏房により防衛目的に構築したもので、土塁・堀・道から成り、領民は『岩槻の金屏風』と自慢していた。

障子堀…堀底に畝をつくり、堀の敵の進行を妨げるもの
時の鐘…寛文11年(1671)城主阿部正春によって鑄造され、武家地と町人地の境である渋江口に設置されていた。現存するものは享保5年(1720)に改鑄されたもので、鐘楼の躯体は嘉永6年(1853)に立て替えた時のものである。

岩槻城裏門…岩槻城の裏門と伝えられている。城内の位置は不明である。

2-4 現存する遺構—黒門について—

岩槻城城門の黒門…桁行七間、梁間二間、長屋門形式。

旧大手門であり、戦前までは県庁、知事公舎の正門として使われていた。旧三の丸居宅門とも呼ばれる。

黒門は明治以降3度の移築を繰り返し、昭和45年(1970)現在の城址公園に移築された。2回目の移築の際、岩槻に戻ってきたときにはすでに屋根が現在のような瓦葺になっていた。

実測調査行った結果黒門は1間6尺真々であった。岩槻市史『近世史料編 藩政史料(下)』に「但惣体萱葺大破雨洩朽腐多量建具大損或ハ紛失、大概者用立不申候」と記載されている。したがって、黒門・長屋門の屋根に関しては茅葺で復原を行う。

昭和33年(1958)に市の有形文化財に指定されている。



写真1. 黒門

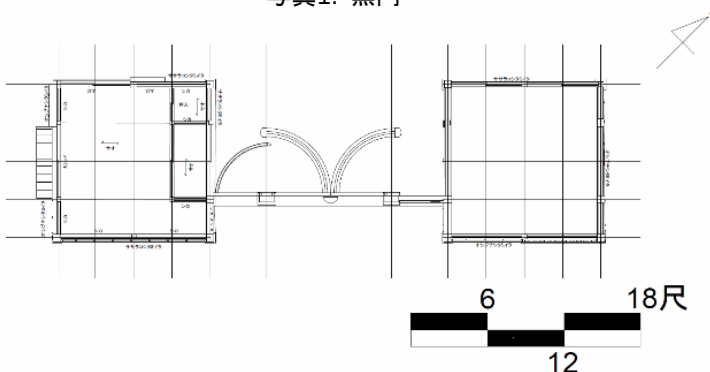


図1. 黒門平面図

3. 史料について

3-1 三の丸に関する史料

表2. 岩槻城に関する史料

推定時期	史料名
松平家岩槻城主期 (元禄6年(1693))	武州岩築三之御丸御屋形差図 (上田市立博物館松平家文書)
大岡家岩槻城主期 (宝暦6年(1756)～ 明治元年(1868))	岩槻城三丸御殿絵図 (田口家文書)
大岡家岩槻城主期 (宝暦6年(1756)～ 明治元年(1868))	岩槻城三の丸居宅絵図 (峯家文書旧岩槻藩士馬場家文書)
大岡家岩槻城主期 (宝暦6年(1756)～ 明治元年(1868))	大岡家岩槻城主期 (渡辺家文書)
大岡家岩槻城主期 (宝暦6年(1756)～ 明治元年(1868))	岩槻城三の丸居宅絵図 (中野家文書)

3-2 新たに市に寄託されたり発見された史料

近年「三の丸御殿絵図」が新たに2枚発見された。一枚は「岩槻城 三丸御殿絵図」(田口家文書)、もう一枚は「岩槻城 三の丸居宅絵図」(中野家文書)である。史料には三の丸御殿や表門(長屋門)の平面構成が詳細に描かれていて、三の丸の様子・建造物の詳細を知ることができる貴重な史料である。三の丸では大岡家城主期に「建て足し」が実施され、時期は不明であるが、二の丸絵図(渡辺家文書)に安永4年(1775)と記載され、同時期の三の丸絵図に「建て足し」があることから、宝暦6年(1756)～安永4年(1775)の間に増築されたと考えられる。田口家文書は「建て足し」前の絵図、中野家文書は「建て足し」後である。絵図より右側の部分が増築されていることが分かる。この史料を基に市指定文化財黒門整備が開始された。下と右下にあるのが長屋部分である。その中でも左下の部分が現存遺構である黒門である。

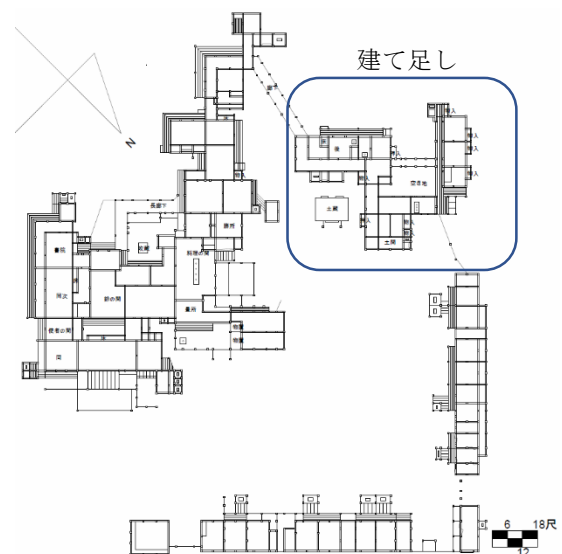


図2. 中野家文書平面図

4. 御殿の推移と絵図の変遷

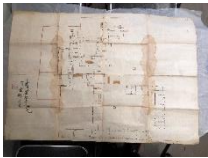
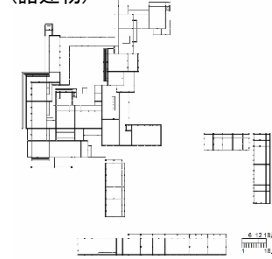
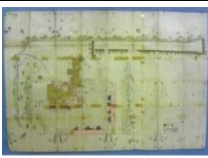
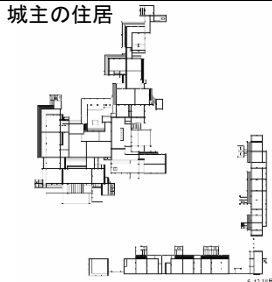
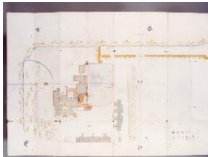
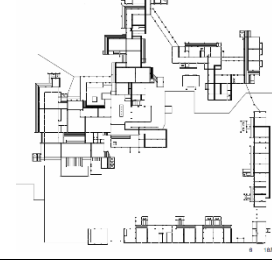
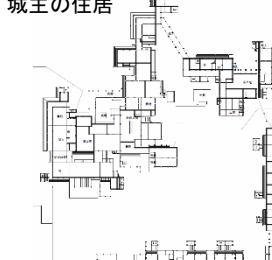
4-1 御殿の推移

表3. 年代別御殿の用途

	本丸御殿	二の丸御殿	三の丸御殿
元和2年(1617)~元禄6年(1693)	御成御殿	住居	不明
元禄6年(1693)~享保13年(1728)	御成御殿	不明	住居
享保13年(1728)~廃城	破棄	御成御殿	住居

4-2 三の丸御殿絵図の変遷

表4. 絵図の変遷

 武州岩築三之御丸御屋形差図 (上田市立博物館松平家文書) 元禄6年(1693)	(諸建物) 
 岩槻城三丸御殿絵図 (田口家文書) 宝暦6年(1756)~ 安永4年(1775)	城主の住居 
 岩槻城三の丸居宅絵図 (峯家文書) 宝暦6年(1756)~ 安永4年(1775)	建て足し (計画案) 
 大岡家岩槻城主期 (渡辺家文書) 安永4年?	城主の住居 
 岩槻城三の丸居宅絵図 (中野家文書) 安永4年(1775)~ 明治元年(1868)	城主の住居 

4-3 二の丸御殿、三の丸御殿絵図の比較・考察

松平家文書と田口家文書を平面から比較すると松平家文書は一部使われなくなったであろう建物や玄関前の建物が減築され、長屋門や南西方向に御殿が増築されている。田口家文書と峯家文書を比較すると峯家文書は田口家文書に増築するための計画案であることが推測できる。次に中野家文書と渡辺家文書を比較すると一部屋だけ増築または減築していることがわかる。このことは二の丸御殿の絵図の比較によりわかる。

二の丸御殿中野家文書には二の丸御殿渡辺家文書ほどの情報量はないが、御寝所跡と記載されている。これにより中野家文書のほうが渡辺家文書より新しいということが推測される。したがって、渡辺家文書→中野家文書となり三の丸御殿では渡辺家文書から中野家文書は減築されたものだと考えられる。

松平家文書と田口家文書を比較すると御殿の部屋数が増えているのは、元禄6年(1693)ごろから城主の住居として利用されていることや当時藩の政治を行う場所が城主の住居である御殿であったため、より多くの部屋が必要であったためだと推測することができる。

これら5つの絵図を比較していき時代が下るにつれて城主の私邸であり休息や保養に重点が置かれる奥御殿が増築されたと考えられ、主君と家臣の対面や儀礼、藩政の実務を行うための表御殿の奥に現れ、さらに時代が下るにつれて表御殿から離れていき、最終的には廊下によって隔てられ、より独立した空間となっている。



写真2. (左写真) 二の丸御殿渡辺家文書

写真3. (右写真) 二の丸御殿中野家文書

5. 三の丸御殿復元に向けて

5-1 スケールの比較・考察

黒門のスケールは実測調査を行った結果1間6尺真々、柱太さが6寸であった。しかし、岩槻城本丸御殿は一間6.3尺で復元を行っている。また、現存している川越城本丸御殿や二条城二の丸御殿は一間6.5尺である。

本丸御殿の復元研究のように現在の地図上に三の丸御殿平面図をプロットし、比較検討を行う。また、6尺畳割りと6.3尺真々はほとんどの外形が同じサイズである。平面図に6寸×3寸の畳を当てはめ比較検討を行う。

現在の地図と昔の堀などの様子がわかる地図に『日本の城ー36ー』に記載されている岩槻城の復元イラストをもとに三の丸御殿の位置を特定しプロットした結果、6尺

と6.3尺のどちらかの可能性が考えられる。また、畳を平面図上に当てはめた結果、6尺畳割りと6.3尺真々だとおさまりが悪く、6尺真々はおさまりが良い。したがって、6尺真々で復元を行う。

5-2 屋根素材

御殿建築の屋根材には柿葺や瓦葺などが用いられるが、岩槻城跡発掘調査において、瓦の出土量がきわめて少なかったことより本丸御殿の屋根は瓦以外の素材であったと考えられ、柿葺で復元を行った。二条城二の丸御殿は栩板葺であり、貞享3年(1686)より以前から瓦葺であった。川越城本丸御殿は瓦葺であった。

現存遺構である黒門は岩槻市史『近世史料編 藩政史料(下)』より茅葺の記載があったため本研究で行う三の丸御殿の復元は茅葺で行う。

6. 復元

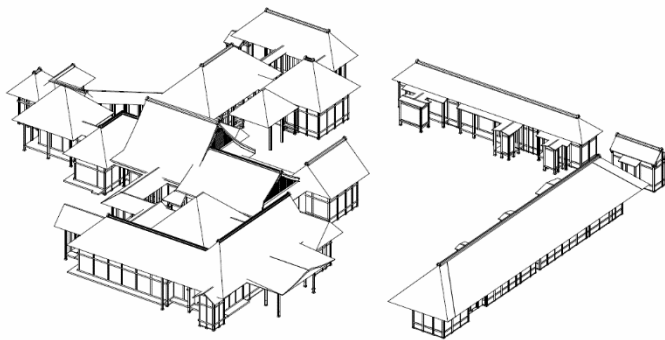


図3. 三の丸御殿外観パース

6-1 黒門・長屋の復元

実測調査を行った結果と絵図を比較すると柱の数や位置が変わっていることがわかる。これは居宅として利用する際、窓をつけるために変わったものではないかと推測される。

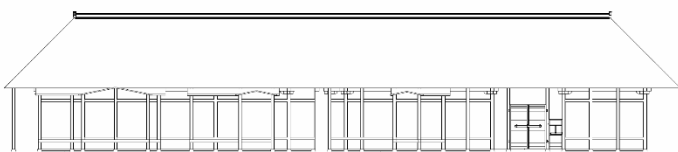


図4. 黒門・長屋南西方向外観パース

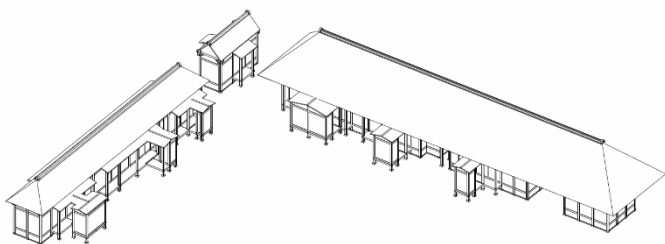


図5. 黒門・長屋外観パース

6-2 三の丸御殿の復元

三の丸御殿を復元するにあたって建具の記載が少なかったため本研究ではすべて漆喰壁で、料理の間などの火を使う部屋の屋根に関しては瓦葺で復元を行った。

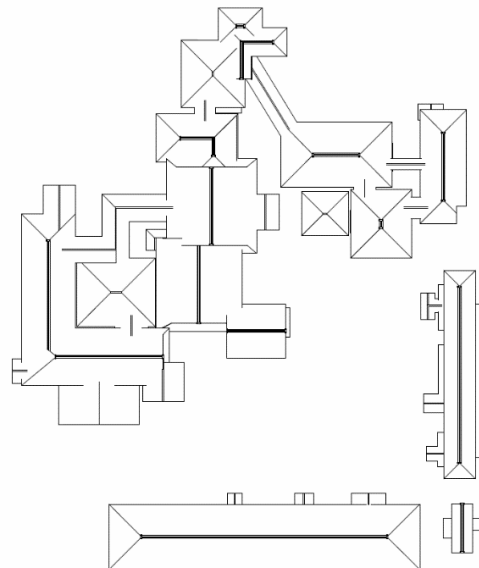


図6. 三の丸御殿屋根伏図



図7. 三の丸御殿南東方向外観パース

7. 総括

黒門は当時の岩槻城を知る数少ない現存遺構であり、岩槻城三の丸御殿を復元させることのできる価値のある建築物である。現在の黒門は柱が傷んでいる、基礎がなくなっている部分がある、建具により支えられているギリギリの状態である。なるべく早く修復工事を行うべきである。

三の丸御殿は時代が下るにつれて奥御殿が表御殿から徐々に離れていき、それぞれの役割ごとにわけられていると推測できる。御殿の屋根には柿葺や瓦葺が多いが三の丸御殿は茅葺であった可能性がある。御殿とは敷居が高いもので、屋根が茅葺の御殿というのは全国的にも数少ないものであり、歴史的価値のある建築物である。

参考文献

- 1)『岩槻市史 近世資料編 藩政史料(下)』岩槻市
- 2)『岩槻城本丸御殿の復元研究』関口陽子/2006
- 3)『岩槻郷土文庫第三集 岩槻城と城下町』岩槻市教育委員会/2005
- 4)突破さいたま市文化財紹介岩槻城址 <http://www.city.saitama.jp/04/005/006/001/002/p002206.html>
- 5)『日本の城—36—』DeAGOSTINI/2017